

# FOCUS Vol.11

長洲町でキラリ輝く人たち

「子どもたちの喜ぶ顔が何よりうれしい」  
毎年自ら育てた菊の苗を町内小中学校へ寄贈

かご はら よし たか  
**籠原 善隆**さん (71歳 古城)



▲腹栄中学校生徒との菊の苗植えの様子。  
このような活動を通じて、子どもたちに花を育てる楽しさを教えながら交流を深めている。

「菊を見て子どもたちが喜んでくれるのを見ると  
本当作ってよかったなって思いますね」



「菊を毎年あげているのはお世話になっていいる地域への恩返しでもあるんです」。そう話す籠原善隆さん(古城)が自ら育てた菊を、町内の小中学校へ配るようになって5年。今年も籠原さんの家には2000本以上の菊の苗が栽培されている。

籠原さんが菊と出会ったのは15年前。当時の知り合いからの勧めで菊の苗を10本もらって育てたことがきっかけだった。

「花を育てる楽しさを知り、そこから菊を育てるようになりましたね」。気付けば菊を育てることは籠原さんのライフワークになった。

菊の栽培は決して簡単ではない。きれいな花を咲かせるためには、苗の成長と合わせながら鉢のサイズを変えたり、「芯止め」と呼ばれる茎の芯を途中で取り出す作業を行ったり、太陽の強さによって苗に当たる光を遮断させたりと入念な手入れが必要だという。しかし「丹精込

めて一つ一つ手入れをすれば花が応えてくれます。それが楽しいですね」とほほえむ。

そんな丹精込めて作られている菊が寄贈されたのは、当時老人会で利用していた六栄小学校に何か恩返ししたいという思いからだ。現在は腹栄中、腹赤小、清里小にも寄贈され、時には授業の中で菊の苗と一緒に植えて植物とふれあう活動も行っている。「子どもたちが直接見て触って楽しんでいる姿を見ると、私もとても楽しくなります」。

子どもたちにきれいな花を見てもらいたいと、朝5時半に起床して2日に1度、六栄小にある菊の手入れも行う籠原さん。「今度は一から花を育てることを通じて、自ら育てる楽しさを子どもたちに伝えたいですね」と話す籠原さんは、これからも「菊」を通じて、地域と、そして子どもたちとつながり続けていくことだろう。